

第一回特別企画展「誕生100

年記念 火野葦平・岩下俊作・劉寒吉 展」



九州市出身の作家、火野葦平、岩下俊作、劉寒吉の生誕百年を記念して三人展を開催しました。

○会場 11月1日～14日まで
○展示資料 約二百点
○来場者数 四〇三五人

火野葦平

火野葦平の河童志向がいつのころから始まったかは定かではない。

「幼いころ、兄の葦平と二人で、父、玉井金五郎の腕枕で聞いた寝物語りは忘れがたい。父は、河童の手が、ニョキニョキと伸びて、二里も三里も先の物を取って行く話など、妖怪変化が登場する話をよくしてくれた。外題は毎晩変わった。あとでわかったのだが、それは全部父の創作であった。」
実弟、玉井政雄から聞いた話である。

考えてみると、火野葦平ほど、近代国家への道をひたすら懸命に歩いて来た、小国日本民族の体臭を身につけた作家も珍しい。ホシネで生きようとすればするほど、反措定として、国家や家が行手をはばむ。葦平の生涯は、その国家や家に殉じようとする、もうひとりの自己との闘いであった。火野葦平にとって「河童物」は、そうした闘いの狭間において、ホシネの嘔吐を可能にする、数少ない回路だった、と言ってもよいかも知れない。

葦平は、河童王国にひとり住むことをきらって、多くの友人知己を誘ったが、それは、孤独の裏返しにの所業に他ならなかった。

はないか。

毎年催された、あの賑やかな河伯洞の新年宴会のさ中であつてさえ、葦平の孤独は深まっていたのではないか、と思うことがある。

晩年上梓した「河童曼陀羅」に転載されている色紙も、その一つである。

中央に、葡萄やバナナなど総りの秋の果実を山盛りした朱塗りの大皿を据え、右手前に、細身の洋酒瓶。瓶に貼られたレットテルには、河童が描かれていて、次のような讀が、空白を埋めている。

レットテルはかなしからずや／そらたかく／秋ふかければ／もろもろの果実みのりて／うづたかくうつはにあれば／そのにほひ／かぜにかほりて／そのいろのめにいたかなし／めひからし／うでたか／ふり／たうべんと／ころあせれど／びいどろの／びんのおもてに／はられたる／かみのせかいに／いづくも／あらぬおもひは／しゆくめいの／いのちかなしや／げにびいどろのレットテルはかなしからずや

近代作家の中で葦平ほど、歴史の烙印とも思えるレットテルを貼られ続けた人も稀である。戦前は「赤」、戦時中は「国民的英雄」、戦後は「戦争協力者」。しかし、その狭間にあって、葦平の胸中に

発酵しつづけたものは、一貫し

て、日本の近代化を底辺で支えた庶民群像に対する、いとおしみの情だったように思えてならない。「糞尿譚」も「麦と兵隊」も、「花と龍」も、その酵母から誕生した作品ではなかったか。近ごろ、しみじみ、そう感じるようになった。

この色紙が「江戸表」（東京阿佐ヶ谷、中山省三郎邸）に於いて描かれたのは「しようわ じゅうごねん くがつにじゅうはちにち」。「兵隊三部作」によって「国民的英雄」の名を博していたころのことであった。

没後四十六年経った今も、「戦争協力者」のレットテルは剥がされていない。葦平の嘆きは深い。まことに、「しゆくめいの いのちかなしや」である。拙著『襤褸の人』も「河伯洞発掘」も、そのレットテルを剥いで、実像に迫る営為に他ならない。それは、無念の死を遂げた火野葦平という作家に献じる白菊の花であるばかりでなく、近代化を急ぎ過ぎた小国日本がたどった歪みに迫る営みの第一歩である。

鶴島正男

鶴島正男氏は12月21日早朝、ご逝去されました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

岩下俊作

岩下俊作は、その全生涯を通じて実に多岐にわたる文学の魅力ある主題を追って、逞しく前進した作家であった。

十代の頃、すでに短い戯曲や創作を書いて、文学への早熟を見せているが、卒業後、折からの不況で就職難などの苦澁をなめる。

その岩下の支えとなったのが詩であった。八幡製鐵所に就職した岩下俊作は、劉寒吉、草木原触日、芥屋碌比古と創刊した詩誌「稜体発光」「とらんしつと」に、「不発魚形水雷の航程表」「詩人の備忘録」などの実験的な詩を次々と発表、また詩論「汎力動詩派の詩」などを発表して、自ら熱い発光体となった。

「とらんしつと」に十七号から参加した火野葦平が、詩集『山上軍艦』を出版して出征、「糞尿譚」で第六回芥川賞を受賞して異例の戦地受賞となったことは、岩下俊作に大きな刺激を与え、詩から小説へ転向の契機となった。岩下俊作は、明治・大正の小倉を舞台に、無骨な申夫の哀切の愛の一生を描いた「富島松五郎伝」で「改造」に懸賞応募して、佳作入選となる。

「富島松五郎伝」は、更に「九州文学」と「オール読物」に改作